概 要 報 告

実施期日	８月３日（木）
部会名	小学校　外国語活動・外国語部会

神奈川県研究主題

個々の子どもの困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫

テーマ

『外国語に心理的障壁を感じる児童への支援』

提案概要

【課題意識】

○５年生の当初から児童Ａは、ＡＬＴが順番で児童を指名すると顔が青ざめる、お腹が痛くなるなど、外国語が理由で登校できない状況が続いた。どのように関われば児童Ａが安心して授業に参加できるかを試行錯誤し、児童Ａも参加できる外国語の授業実践を行い、それをきっかけとして全ての児童の困難さに応じた実践となるよう取り組んだ。

【通年を通しての実践】

① ＩＣＴ機器の効果的な活用を行った。picture dictionary をロイロノート上に再現し、活動が早く終わったすきま時間や休み時間などを利用して、課題が作成できるようにした。

② 児童Ａやクラスの実態を踏まえ、話すこと（発表）の評価の場面では、形式を選べるようにした。（全体で、別室で、友達同士で、個別で、ＡＬＴとのやり取りなど） 児童Ａについては、４技能５領域にバランスよく触れることが難しい。本実践では、児童Ａが、話す（やり取り）、話す（発表）を行うにはどのようにしたらよいかを考え、計画した。そのために、『自分の考えを発信する際の不安感を減らす』ということに焦点を当てて取り組んだ。

【本実践】

① ターゲットとする言語表現を極力絞る

② 発表場面で不安感を軽減するさらなる工夫

・ロイロノートの提出箱は、大型モニター等には映し出さず、画面上で教師が確認してクラス全体に発表する。

・カード交換をしながらやり取りをする、チェンジゲームを行い、関係性のよい児童が近づいて話しかけるという流れになるようペアで活動をする。チェンジゲームの際、クラス全体の目標人数を設定し、関わった人数を合計する。関わった人数を見える化することで、互いに協力しながら挑戦できる雰囲気を作り、その中で、児童Ａにも関わろうとする児童が増えるようにする。

③ 児童Ａが意欲をもって参加できる題材の工夫

・好きなアニメやゲームなど、児童が思いを込めやすい題材設定にする。

質疑応答

Ｑ：場面緘黙の子や、児童Ａと似たような子がいるが、個別の対応よりも、クラス全体に目を向けてしまう。英語が得意な子や、児童Ａ以外の子には、どのような手立てを行ったのか。

Ａ：例えば会話の時などは、既習表現は制限せずにどんどん使ってよいなどと言葉かけを行った。

協議の柱及び協議・概要

【児童Ａのような児童・生徒との関わり方や実践例、具体的な工夫の共有】

〇単元によって、全体発表、個別発表、グループ発表など、色々なバリエーションでの発表を行う。

〇発表の仕方に選択肢をつくる。友達と一緒に行う、録音して提出をする。

〇ふりがなをふるなどのサポートを行う。

〇発表時、クラス全体に、聞いているときに反応をすることや終わった後に拍手をすることなどの指示をして、発表しやすい和やかな雰囲気作りを行う。

〇発表は子どもにとってハードルが高く、中学生でも前に出るだけで泣き出してしまう子もいるため、個別の支援が必要。一方、発表方法を選ぶ際は、公正に評価をする必要がある。

〇ランダムに指名をすることに利点はあるが、それが原因で授業に参加できなくなった児童・生徒がいる。

〇失敗してもよいという雰囲気作りが大切。また、授業外の時間も含めた言葉かけも必要である。

〇順番に指名する際は、順番を教師側で配慮するなど、苦手意識を持った児童・生徒が答えやすいよう、工夫する必要がある。

〇動画を作成するなど、児童・生徒が興味関心を持てるような場面設定を行う。

〇誰とでもコミュニケーションが取れるよう、毎回席替えをしてペアを変える。

〇担任以外が外国語の授業を担当する際は、支援が必要な児童・生徒の情報を共有することが必要であるが、その時間の確保が課題である。

まとめ概要

外国語に嫌悪感を抱いていた児童Ａだったが、友達とやり取りを行うチェンジゲームの実施や、ＩＣＴの効果的な活用、児童の興味関心を惹きつける題材選びなどを通して、英語によるやり取りができるようになり、休まず登校できるようになった。

児童Ａが安心して授業に取り組むためにはどのようにしたらよいかを考えながら授業をデザインした結果、他の児童への安心感にもつながった。

授業の振り返りを毎時間書くことで、反応していない児童の考えや様子を知り、それを次時以降の言葉かけや指導の参考にすることができ、指導と評価の一体化にもつながった。

担任の先生による、きめ細かな児童理解、児童の実態に合わせた授業展開が実を結んだ、素晴らしい授業実践であった。